

## 2024年度（令和6年度）第2回千葉県体育学会大会抄録

### <一般研究>

特別支援学校の生徒と共に行うパラスポーツ活動が教員を目指す学生の意識に与える影響

○下永田修二、杉山英人、西野明、七澤朱音、佐野智樹、辻耕治（千葉大学）、根橋亘（千葉大学教育学部附属特別支援学校）、根来彩夏、駒井宏美（千葉大学大学院）

2020 東京オリ・パラを契機に日本ではスポーツを通じたインクルーシブ教育が推進されるようになった。しかし、教員養成における関連科目は散見されるのみである。また、インクルーシブ教育の視点を取り入れるには障害児指導経験など直接体験の必要性が謳われているが十分に行われているとはいえない状況にある。そこで本研究では教員を目指す学生が特別支援学校の生徒と一緒にパラスポーツ活動を行うことによる意識の変化について検証することを目的とした。対象は、教員を目指す教育学部、教育学研究科の学生・院生とし、活動前後に知的障害者に対するイメージやスポーツ指導に関する意識調査を行った。その結果、パラスポーツ活動を通して、特別支援学校・学級の児童・生徒に体育・スポーツを指導する自信が高まる傾向がみられた。また、活動後、話しやすい、親しみやすいなど、知的障害者へのイメージが向上する傾向がみられた。

15 人制ラグビーのボール争奪局面におけるプレー様相 - ラグビーワールドカップにおけるレベル別比較 -

○廣瀬恒平（尚美学園大学）、千葉剛（防衛大学校）、澤田大地（千葉経済大学附属高等学校）、高橋仁大（鹿屋体育大学）

本研究では、ブレイクダウンにおける防御側のプレー様相に関するレベル別の差異を調査するため、ワールドカップ出場チームの上位8チームと下位8チーム、上位8チームにおける勝利チームと敗北チームの比較を行った。分析の結果から、下位レベルは上位レベルに比べて3秒未満のボール出しが少ないのに対して、敗北チームは勝利チームに対して逆の結果にあることが認められた。攻撃側の参加人数に関して、下位レベルは上位レベルに比べて参加人数の少ないラックが多いのに対して、敗北チームは勝利チームに対して逆の結果にあることが認められた。防御側の参加人数に関して、下位レベルは上位レベルに比べて参加人数の少ないラックが有意に少ないという結果だった。これらのことから、下位レベルは防御においてボール出しを遅らせること、攻撃側に人数をかけさせること、少ない人数でラックに対処することができておらず、これらを改善することが上位へのレベルアップの要点であると示唆された。

様々な跳躍運動と走運動を測定した際の主観的難易度について —大学生と小学生を対象として—

○青木和浩、勝又健太（順天堂大学）、岩川天羽（順天堂大学大学院）、杉林孝法、河村剛光（順天堂大学）

本研究では、垂直方向、水平、横方向と異なる三方向の「跳ぶ運動」と直線走や方向転換走の「走る運動」を測定した際の主観的難易度を調べ、小学生でも簡易的で有効な測定項目の選定をする基礎資料を得ることを目的とした。

検証①男子大学生 31 名、女子大学生 16 名の計 47 名を対象に「跳ぶ運動（9 種目）」と「走る運動（4 種目）」の測定を実施し、大学生の視点と小学生の視点での主観的難易度を調査した。

検証②小学生（3～6 年生、男子 30 名、女子 32 名）を対象に「跳ぶ運動（6 種目）」と「走る運動（3 種目）」「筋力（2 種目）」の測定項実施し、主観的難易度を調査した。

本研究結果から、垂直方向に跳ぶ運動は「垂直とび」の主観的難易度は低かった。水平方向に跳ぶ運動は「立幅跳」の主観的難易度は低く、「立五段跳」より「立三段跳」の方がやや難しいと感じていた。横方向の跳ぶ運動は、大学生にとっても難しい測定であり、小学生では実施しなかった。走運動は、直線走の主観的難易度は極めて低かった。方向転換走も主観的難易度が高くはなかった。

跳ぶ運動も走る運動も小学生にとって、主観的に難しいと感じる種目では無かった。小学生に実施した全ての測定種目が活用できることが伺われた。

大脳皮質運動野の興奮性が持久的トレーニングの効果に与える影響について

○安永雄貴（千葉大学大学院）、西崎夏芽（八街市立実住小学校）、小宮山伴与志（敬愛大学）、下永田修二（千葉大学）

本研究は、経頭蓋直流電気刺激（tDCS）を用いて運動野の興奮性を増大させることが持久的トレーニングの効果に与える影響を検証することを目的とした。

対象は C 大学在学学生 16 名で、陽極刺激群と偽刺激群に分け、2 週間の有酸素トレーニングを行った。トレーニング効果に関しては、漸増負荷テストを実施し、ペダリング継続時間や総仕事量から評価した。

結果は、2 週間のトレーニングにより全体的な持久的運動能力が有意に向上したものの、刺激の主効果は認められなかった。

考察としては、陽極刺激による運動野興奮性の増大が、身体的および心理的負担を軽減し、追加的なトレーニングの効果が得られなかった可能性が示唆された。今後は、陰極刺激など他の条件での検証を行っていきたい。

## 残塁ありのベースボール型ゲームにおける走攻守の「わかる」と「できる」について － 技能・戦術認知別の抽出児童に着目して －

### ○高橋明日美（千葉大学大学院）

本研究では、出塁の機会を保障することが可能になる「変形ダイヤモンドベースボール」で残塁ありのゲームの実践を行い、戦術認知テスト、打撃直前の意図の調査、プレー分析によって実態の調査を行った。結果、守備に関しては、残塁ありゲームを実践することによって「送球を受ける側」の役割行動についての理解が深まること、走者としての経験や送球を受ける側の動きの経験から「捕球者の送球先」という戦術的思考を間接的に学ぶ可能性が示唆された。攻撃時の「走者を進めるために」という戦術的思考については、下位児童は教師と児童のやり取りを見ることで気づきを得て、経験によって定着させる過程があったことが示された。上位児童は他の児童への助言から、この思考について「わかる」状態にあったことがわかったが、実践はされなかった。守備の「送球を受ける側」のプレーが継続されなかったことも含め、戦術的思考の高まり、役割行動の継続のためには守備と攻撃の拮抗が必要であることが示された。

### <実践研究>

## 学生による SDGs の取り組みについて ～帝京平成大学パラスポーツサポート部の活動から～

### ○馬場宏輝（帝京平成大学）

本研究は「東京 2020 大会のレガシーを後世に伝える。その為の取組みを組織化・事業化する。これらの取組みを通じて共生社会と SDGs を実現する」という筆者のライフワークを学生が自主的・主体的に継承することでスポーツを通じた社会貢献と学生の学び・経験になることを証明する社会実験的な取り組みである。パラスポーツサポート部は学生による自主的・自立的なパラスポーツ等を通じた支援活動により、弱い立場（社会的・経済的・体カスポーツ弱者）にいる方々と地域社会へ貢献することを目的として活動している。パラスポーツサポート部は、いちほら SDGs アワードにおいて「見落としがちな経済弱者の支援」「若者のやる気を搾取にしない持続可能にする仕組みづくり」が SDGs3.0 にあたるとして優秀賞を受賞した。今後の課題としては、筆者によるサポート（社会実験）からいかに学生の自走へつなげるかと学生の経験・成長をいかに客観的に評価・可視化するか（出来るのか）である。

## レクリエーションスクーバダイビングに伴う心理状態の改善—熟練ダイバーの呼吸法と脳波記録による事例研究—

○麓 正樹（東京国際大学）、赤池行平（東京国際大学）、小川幸代（東京国際大学）、田井健太郎（群馬大学）

レクリエーションスクーバダイビングが精神的健康の改善に貢献することが報告されている。その理由として、ダイビング中には一般的にゆっくりとした深い呼吸を継続することがあげられているが、具体的な呼吸法は調べられていない。そこで本研究では、スクーバダイビングに熟練したダイバーの呼吸法、心理状態と脳波の変化について調べた。被験者は熟練ダイバー4名であった。被験者は最大深度約8mまでの範囲で20～30分のダイビングを行った。ダイビング中にデジタルビデオで顔を断続的に撮影し、レギュレーターから漏れでる気泡の持続時間の測定により、呼吸時間を算出した。また、ダイビング前と直後、30分後に心理テスト（POMS）を実施し、脳波の測定を行った。その結果、入水開始直後および離水直前と比べて海底付近を泳いでいる最中の呼吸時間は延長した。心理テストに関しては、ダイビング後に活気の増加と緊張不安の軽減があった。脳波については、ダイビング後に $\alpha$ 波帯域のパワーに増加傾向を認めた。以上の結果から、熟練ダイバーのダイビング中には、ゆっくりとした呼吸が行われており、脳波の変化を伴う気分の改善が得られる可能性が示唆された。

### <授業研究>

#### セストボールの学習における空間を意識した授業実践

○櫻田基紀（九十九里町立片貝小学校）、小後貫淳（御宿町立御宿小学校）、小泉岳央（日本体育大学）、佐野智樹、七澤朱音、下永田修二（千葉大学）

本研究は、セストボールの学習を通じて空間を意識した授業実践を行ったものである。現代の児童は、スポーツにおいてボールを持たないときの動きや課題解決力に課題を抱えており、空間を把握する力の育成が重要視されている、小学校学習指導要領でもボールを持たない時の動きが強調されている中、セストボールは360°からのシュートが可能であり、選手やボールの位置を把握する能力を養うのに適した競技である。本研究では、空間を把握する力を高めるために、ゲームや教材・教具を工夫した学習過程を作成し実践した。その結果、児童のサポート行動やボールパス、シュートチャンスの増加が確認され、自己肯定感の向上も見られた。これにより、空間を把握する力の向上がチームプレイを促進し、スポーツの楽しさを実感する機会を提供できることが示唆される。

Gボールを活用した体づくり運動の検討 ―マット運動へつながる運動感覚に着目して―

○小後貫淳（御宿町立御宿小学校）、櫻田基紀（九十九里町立片貝小学校）、佐野智樹、七澤朱音、下永田修二（千葉大学）

本研究では、小学校4年生を対象として、多様な動きをつくる運動とマット運動において、単元構成の工夫とGボールを活用した運動感覚を高める活動を通して、学習意欲や技能の向上を検証することを目的とした。多様な動きをつくる運動とマット運動の単元を組み合わせ、Gボールを使用した運動感覚を高める活動を継続的に行った。その結果、Gボールを使用した活動によって、情意面と運動有能感の向上が認められ、児童の学ぶ姿勢に変化が見られた。児童ができる喜びを実感し、学習意欲が向上したことが明らかとなった。特に下位の児童においては向上が顕著であった。技能面においては、前転、後転、壁登り逆立ち、壁倒立の技能を調査した。その結果、継続的な運動感覚を高める活動により、技能が向上した。特に前転と壁倒立においては、Gボールを使用したことによる技能の向上が明らかとなった。